比較の視点で、詳細な論を展開されている。傾聴すべき示唆に富む考察文である。（注４）ここでは、その論に拠りつつ若干の私論を付加して、以下に記す。

この二詩ともに年内に到来した「立春」に触発されて詠まれた作品であること。そして「278 立春　在十二月廿六日」の詩が、讃岐国守時代に「492 元年立春　十二月十九日」は太宰府謫居時代に詠まれたという、いずれも、自分の意志とは別の所（外圧）で京を離れた異郷の地で詠作された作品であるという共通点がある。

ところが、道真の身の上に目を移すと決定的な相違がある。年齢に十四年のブランクがあることもさることながら、道真自身の置かれている状況が全く異なる。前者は、讃岐国守任期満了一年前の作であり京へ戻れるのが確実であるのに対し、後者は、罪を被り、左遷されて、京に戻れる望みも絶たれる。つまり、「延喜」という開元が行なわれ、大赦が行なわれながら、道真には、それが全く及ばず、「逆賊」のレッテルまで貼られてしまうという事態をつきつけられているのである。その事情については拙著でこの詩の詠まれた数か月前に同じく道真の詠作した「讀開元詔書」の注釈を通して詳しく論じた。（注６）その絶望の中で詠まれた作品であることを改めて想起すべきだと思う。

それが、五句目の「根拔樹（根拔けたる樹）」であり、六句目の「骨傷魚（骨傷むる魚）」なのである。この道真が、七・八句「偏憑延喜開元暦　東北廻頭拜斗杓（偏に延喜元暦を開くを憑み　東北に頭を廻らして斗杓を拜せしを）」の二句を従来解釈されてきたような、「それでもなお、醍醐天皇に忠義を貫き、天皇の大赦により京に戻れる期待を暗示している」と詠むことに、いささか違和感を抱く。この作品が太宰府着任時の初期の頃であるならば十分、肯首できる心情であるが、この『菅家後集』が、一部を除いて原則、時系列に配置されていることを考えればこの作品は決してそのような時期のものではない。